

養護施設収容児の社会的態度に関する一研究

浅 木 森 利 昭

I 問 題

養護施設に収容されている児童が、その心身発達の諸側面において、一般家庭児と比較して劣性であることが認められ、この劣性の症候群が Hospitalism と呼ばれるようになって以来、養護施設における養護理論は、もっぱらそのHospitalismの解消を目標に展開されているようである。しかし、養護施設を、施設職員が、施設児に対して、或一定の意図及び計画の下に、人間の価値実現を目指して働きかける教育実践場面であると考えれば、Hospitalismの解消という、いわば消極的養護理論よりも、むしろ、積極的養護理論が必要である。このための手がかりの一つとして、施設職員のその働きかけの効果が問題となろう。この働きかけの有効性が実証されれば、施設職員の日常の養育方法の一つの示唆を与えることになろうし、ひいては、施設児の健全な人間形成に資するものと考えられる。この研究では、養護施設における養育目標の一つとして、「望ましい社会的態度の形成」をとりあげ、態度形成の一つの条件として考えられる「既成の態度の採用」という観点から、施設児の社会的態度の形成に施設職員が働きかける際の有効性を問題とする。

II 目 標

「既成の態度の採用」の仕方は、既成の態度の知覚の仕方に規定されると考え、更に、その知覚の仕事は、F. Heider の Theory of Balance に従うものと仮定すれば、次のような定式化ができる。即ち、今、態度の対象をX、施設児をPo、PoのXに対する態度をXo、Poが知覚する施設児が関係する人(Pi)のXに対する態度をXi、PoとPiとの関係を α_i とすれば、

$$\text{Sgn}(Xo) = \text{Sgn}(\alpha_i X_i)$$

又、 $\text{Sgn}(Xo \cdot Xi) = \text{Sgn}(\alpha_i)$

今、Parameter $\text{Sgn}(Xo \cdot Xi)$ を標本からの不偏推定値として求めれば、

$$\text{Sgn}(Xo \cdot Xi) = E(\text{Sgn}(Xo \cdot Xi))$$

ただし、Xo、Xiはそれぞれ

xo、xiの確率変数とする。

$$\therefore E(\text{Sgn}(Xo \cdot Xi)) = E(\text{Sgn}(\alpha_i))$$

従って、 $E(Xo \cdot Xi) = E(\alpha_i)$

$$E(Xo \cdot Xi) = \rho_{xo(xi)} = \alpha_i$$

かくして、 α_i の測定が可能となる。

この研究の第1の目標は、この測定した α_i が態度採用を規定する一要因と考えられるか否かの検討にあり、第2の目標は、Pi(i=1(保母), 2(指導員), 3(施設長) 4(世間の大人), 5(学校教師))について α_i (i=1, ..., 5)を測定し、その分布をみることによって、施設児の「既成の態度の採用」の仕方の様相を探ることである。

III 方 法

(予備調査) 態度区域を引きだされた意見的態度とし、家庭、学校、社会、国家に関する、しきたり、制度法律等に対する意見項目100個から構成される質問紙を作成した。これらの意見について、7段階尺度で、施設児の態度を測定し、因子分析(重心法)によって抽出した態度因子のうち、第1因子(未回転)を民主主義的・合理主義的・封建主義的・非合理主義的態度因子と解釈し、この因子の負荷が比較的高い意見項目のうち、家庭、学校に関する項目を除いた残りの項目計33個を調査I、調査IIに用いることにした。

(調査I) この調査は、調査I—(Xo)、調査I—(Xi)(i=1, ..., 5)からなり、各調査票は、互に配列は異なるが因子負荷量、平均得点を考慮して、前述の33項目から選定した、16項目の意見から構成されている。調査I—(Xo)は、施設児の態度を測定するためのものであり、測定の方法は、予備調査の場合と同様である。更に、予備調査で得たこれらと同じ16項目についての測定値との間で $\gamma_{xo \cdot xi}$ を求め、これを態度の安定度とみなし、 α_o とした。他の調査I—(Xi)は、施設児が知覚するPiの態度を測定するためのものであり、 $\gamma_{xo \cdot xi}$ から α_i を求めた。

(調査II) この調査は、調査II—(Xoi)(i=1, ..., 5)からなり、各調査票を構成する意見項目は、なるべく各調査間で異なるが、因子負荷量、平均得点からはほぼ等質となるように、前述の33項目からえらんだ10項目である。調査II—(Xoi)は、構成した10個の意見項目のおのおのについて、あらかじめPiの態度値を質問紙Iで与えて、その上でPoの態度を測定した。又このあらかじめ与えたPiの態度値を訂正する機会も同時に与えた。これは、今、与えたPiの態度を(Xi)とすると、調査Iで示した α_i と、 $\rho_{xo(xi)} = \alpha_i \neq \alpha_i$ となるようなPiの態度の知

覚は、不均衡の状態であると考えられ、不均衡の状態は、均衡の状態へ向う力を生ずることが期待できるから、 X_0 を X_{0i} とかえるか、 (X_i) を $(X_i)'$ とかえるか、或はその複合した型で α_i を保つか、又は、 α_i を (α_i) とするかによって均衡を保つことが期待され、これを検証することによって、測定された α_i が、「既成の態度の採用」の仕方を知る手がかりになるか否かが判断できると考えたからである。

(調査方法) 予備調査、調査I、IIとも、調査は集団的に行い、調査票の配布、回収は各調査票毎に行った。

(調査対象) 予備調査、調査I、IIを通じて、対象者は愛知県民生部管内の養護施設のうち、調査の協力を得た3施設に収容されている中学生であり、全調査にわたって使用しうる回答を得た施設児は55名(男子33名、女子22名)であった。

(調査時期) 予備調査; 昭和39年10月~11月、調査I、II; 昭和39年1月

(施設児の個人特性についての資料は各施設長から提供を受けた。)

IV 結果と考察

以上の調査から、次のような結果を得た。

(1) $\alpha_i > 0$ であるものは、 $(\alpha_i)' = \alpha_i$ とするものが極めて多い。(ただし、 $(\alpha_i)'$ は $\rho_{x_{0i}(x_i)'}'$ 、又は、 $\rho_{x_{0i}(x_i)}$ 又は $\rho_{x_{0i}(x_i)}$ である。)

(2) $\alpha_i = 0$ であるものは、 $(\alpha_i)' > \alpha_i$ とするものが、 $\alpha_i > 0$ である群に比べて多い。

(3) (1)の傾向は $\alpha_0 > 0$ である、群に(2)の傾向は、 $\alpha_i > 0$ である群に、(2)の傾向は $\alpha_0 = 0$ の群にそれぞれよりい

じるしい傾向がみられた。

(4) 各 P_i について、 α_i の分布をみると、指導員との関係が高いものが比較的多く、世間の大人との関係が低いものが多いという傾向がみられた。

(5) 施設児の個人特性別に α_0 をみると、性別では男<女の関係において、学年別では低学年<高学年の関係において、高いものが多いという傾向がみられた。入所期間では、これらの差異は明らかではなかった。又、これらの個人特性別に α_i をみると、男<女の関係でいずれの α_i についても高いものが多くみられ、女子にあっては同性の保母との関係が比較的高いものが多くみられたが、他の特性については明らかでなかった。

以上の結果から、この研究の目標について考察すると、結果の(1)、(2)、(3)から均衡化の傾向、正符号化の傾向がみられることから、測定した α_i は「既成の態度の採用」の仕方を知る一つの手がかりになるものと判断した。又、結果の(3)、(4)、(5)、(6)から、施設児の「既成の態度の採用」の仕方は、特に指導員の態度に、同調する仕方で行われているものが多いことがうかがわれ、男子低学年にあっては、特に正符号化の傾向を示す $\alpha_0 = 0$ であるものが多いことから、施設職員、特に指導員の施設児に表明する態度、行動に教育的配慮を行うことによって、この次元での態度形成は可能であると判断した。

勿論、この調査は、施設児の母集団を考慮した標本抽出を行ったものではないから、この結論を拡張することは許されないが、少なくとも、この調査の対象になった施設児については、以上のように結論することができよう。